

遊びの神経症

— ユング派の神経症理論を手がかりに —

皆本 麻実

I. はじめに

I-1. 遊びの心理臨床学的考察

遊びは、心理学のみならず、社会学、哲学、文学など、様々な角度から追究がなされてきた、大変に魅力的なテーマである。これほど幅広い分野にまたがって研究の対象とされるテーマはそう多くはないのではなかろうか。心理学ひとつ取っても、発達心理学、動物心理学、認知心理学など、遊びの切り口は多種多様である。

では、心理臨床学の視点から遊びはどのように扱われてきたのか。まず思い浮かぶのは、文字通り遊びを媒介にした遊戯療法という治療実践である。Axline (1947/1972) は遊戯療法において、遊びを、セラピスト・クライエントをつなぐ媒介とし、セラピストの受容的な姿勢など治療の前提となる 8 つの原則を提唱した。精神分析的には、遊びは解釈の対象となるのであるが、クライエントの行う遊び自体に既に治療的契機が含まれるとして解釈を行わない「純遊び療法」を試みた Zulliger (1952/1978) もいる。遊びの有する治療的効果という観点からは、児童心理、障害者支援などの分野において多数を占めている。

このように、遊びというテーマを心理臨床的に論じる際には、遊びが治療にもたらす効果、癒しなど、遊びから派生するものを通して考えられることが多く、中心にあるはずの“遊びそのものとは何か”についてはあまり問われてこなかったことが見受けられる。他方、近年では、遊びの構造やそこから生まれる動きなど、概念としての遊びを臨床事例と照らし合わせながら考えられている研究も散見されるようになってきた(西坂, 2012; 北岡, 2013; 森崎, 2014 など)。筆者も以前、Winnicott (1971/1979) の「遊ぶこと playing」という概念を心理臨床の中で生まれる第三項と捉え直し、その構造や意義を明らかにしようと試みた(皆本, 2014)。心理臨床学における遊びの理解は、徐々に方向性を変えつつあるように思う。

本稿では、遊びとは何であるのかについて、心理臨床学の立場から入っていく試みの一つとして、とりわけユング派の心理学における神経症病理を切り口にしながら、検討を加えていく。具体的には、以下に神経症の心理学的背景について概観し、続く第二章では、臨床心理学が神経症をどう捉えてきたのか、またその中で特にユング派において神経症をどう理解してきたかについて詳細に論じる。そして、第三章において、遊びについての論考を概観し、遊びの持つ性質を明らかにする。次の第四章にて、ユング派の神経症の視点から見ると遊びはどのように理解できるかについて考察を進めていく。また、その中から見えてきた課題については第五章で取り上げる。

I-2. 神経症と深層心理学の展開

さて、先ほど述べたように、今回筆者は遊びに心理臨床学的にアプローチするに当たり、とりわけ神経症の病理を手がかりにして遊びに迫っていこうと考えた。というのも、深層心理学は、精神病理学と共に歩み始めたと言っても過言ではなく、その中でも基盤となっているのが神経症だからである。

19世紀の医師や医学者たちは、それまでの病理学ではどのようにしても理解不可能な、主に心因性の症状を呈する一群の人々に対して、挙って様々な仮説を生み出し、定義づけを試みた。背景には、医学の発展と共に、診断技術の向上が器質因の排除に貢献したという事実がある。このように消極的な診断から生まれた神経症ではあるが、病理解明のために、実際の治療実践の中での確に患者の状態像を捉える努力がなされてきた。田中（2001）によれば、1777年にスコットランドの医師カレンによって、初めて神経症 *neuroses* という言葉が用いられたという。当時の神経症の概念は現在よりも広範なもので、熱性けいれんなど身体疾患を含む一般的な神経疾患にほぼ該当するものであった。しかし、19世紀後半、シャルコー、ジャネ、Freudらによって心的な発症要因を持つ疾患として神経症が注目されるようになり、神経症の心的機序の解明、概念化が活発に行われるようになった。Freud（1895/2008）は『ヒステリー研究』において、神経症の様々な症状の誘因となるのは心的外傷であり、症状と心的外傷の間には厳密な因果関係があることを指摘した。そして、これを基本にしてリビドーの固着、退行という精神力動理論を打ち出すのである。この理論が数々の深層心理学理論の根幹をなしていることから、神経症病理に関する理論なくして、今日に至る深層心理学の発展はなし得なかったといえよう。

一方で、神経症理論に関する主張の異なりは、派閥間の対立を生む要因ともなった。また診断基準も時代と共に変遷し、当初の疾病単位としての神経症は解体していく。そして、DSM (Diagnostic and Statistical Manual of Mental Disorders) の登場は、精神病理学にひとつの革命的变化をもたらした。

DSMは1952年に刊行されて以来、改訂が重ねられ、2013年には最新の第5版（DSM-5）が発表されたが、1980年のDSM-IIIから疾病単位としての神経症は削除されている。DSM-5においても、下位分類の微調整、名称の変更がなされたのみで、基本的には不安障害、身体症状障害、解離性障害など、症状や発症機序により依然として解体されたままである。明らかな病因を特定できなければ、症状で解体していく方法を取るという手法は、近代的な合理主義の色合いが濃いと言わざるを得ない。このような事態を見ると、もはや精神病理に関するこれまでの議論は不要と成り果ててしまったかのように思われるかもしれない。

しかし、このような時代の中、松本（1993）は精神科医の立場から、生物学的研究の趨勢とDSMに象徴されるような操作的診断学の潮流との狭間で精神病理学が思弁的な方向を取りすぎていることを危惧している。松本（1993）によれば、精神病理学は「知識」という形で与えられるべきものではなく、あくまでも一人の精神科医の「営み」としてあるはずのものだという。この指摘には、過去の精神病理に関する知見を旧い「知識」として排除し切り捨てるのではなく、今現在も臨床の中に絶えず流れ続けていく「営み」として捉え直すことの重要性を我々に教えてくれるものではないだろうか。今回は、深層心理学の発展に数多くの影響を与えてきた神経症理論、とりわけユング派の神経症理論を参照しながら、遊びというテーマの心理学的理解を深めていきたいと思う。

II. 心理学における神経症

II-1. 神経症病理の理解

まず、古典的な神経症理論に入る前に、現代における神経症の臨床的特徴を挙げておきたい。一般的に神経症は、(1)心因性 *psychogenic* の障害であること（外因、内因は排除される）、(2)機能的 *functional* な障害であること（非器質性であること）、(3)障害は心身両面にわたって現れることが多いこと（自律神経系の異常など）、(4)特有のパーソナリティが認められること（生得的な体質、神経過敏性や幼児期以来生活史の中で作られる未熟性、自信欠乏、過度の几帳面や完全欲といった神経症の準備性が見られる）、(5)特徴的な状態像を呈すること（病識はあるが、治してほしいと訴えながらも疾病利得にしがみつくと等）、(6)可逆性 *reversible* の障害であること、といった特徴を持つとされている（馬場、1990）。これらは神経症といわれる患者の状態像を羅列した記述であり、とりわけ「心因性」とされる特徴は消去法的に浮き彫りになってくるもので、非常に掴みどころのないものである。心因とは一般に、幼児期の体験や環境因子、反復される精神内界での葛藤や対人的葛藤、また発症に先だって経験された急激な精神的衝撃であるというのが（馬場、1990）、その発生機序に関する見解は派閥や臨床家個人間でも捉え方が異なっている印象がある。

前章においても述べたが、Freud の神経症理論はあまりにも有名で、以後の臨床家たちに多大な影響を与えた。その理論の根本にあるヒステリーの病理に関して Freud (1895/2008) は、誘因となっている外傷との間に厳密な因果関係を持っていると主張した。そして、ここでいう外傷という言葉が殊に心的外傷を意味するとして、心因の意義を明らかにしようとした。このように、Freud が病因を心的外傷、それに起因する内的な葛藤に見出そうとした背景に、神経症をひとつの対象とし、近代科学に基づき分析的に理解しようとした意識があったのではないと思われる。Freud (1895/2008) が発作等のヒステリー症状の消滅や浄化反応（カタルシス）、修正に力点を置いていたことから、神経症を治癒されるべき対象として見ていたことが分かるだろう。このような心的外傷論は当時の臨床心理学に絶大なインパクトを与え、この捉え方は現在でも根強い。しかしながら、Freud が神経症の病因として重要視した対象は、幼少期における性的体験、無意識の抑圧とリビドーの固着、自我の防衛機制と、年代を追うごとに変遷を辿り、Freud 自身の中でも神経症理論が常に流動的なものとして存在し続けていたことが窺われる。

他方、ユング派では神経症をどのように理解してきたであろうか。Hilman (1983/1993) は、そもそも病理 (*pathology*) という言葉そのものが、心理学の心に対する見方の中での医学の役割を明らかにしており、精神病理について我々が考える時、「ただちに病気のことを考える」という在り方が妥当ではないという見解を示している。心理療法が、医学的方法ではなく心理学的方法による治療を必要とする限り、医学モデルへの疑義が生じるのも当然の成り行きと思われるが、近代の心理学者たちは、心理学のモデルから病理をまなざすことに対しては、あまり積極的ではなかったのではないだろうか。さらに Giegerich (2013) は、「神経症は臨床的な実体ではない」(p.5) と言い切り、「他の心的現象よりも我々にそれ自身について考え、思索的に接近し、概念的な思考により理解することを要求する（中略）論理的で知的な病」(p.18) であると述べている。そして、ここが実体化、可視化されると、こころというものは様々な層（意識、前意識、無意識）や働き（イド、自我、超自我）などに変わるといふ。神経症の病理を実証的に理論化しようと試みがなければ深層心理学の発展はなかったが、その一方で、こころは様々な角度からの切り取りを被り、分化を招く結

果となったといえる。そのような時代において、心理学が心理学的に考えることに真正面から取り組んだ人物が Jung であると思われる。

II-2. ユング派における神経症の理解

Jung (*CW10*; par. 355)¹は、「神経症にこそ患者のこころ *psyche* があ」り、まるで虫歯のように神経症を取り除こうとする「魂なき合理主義」の行いは、治療ではなく基本的には「切除術 *amputation*」であると指摘した。この主張の背景には、「我々は神経症を“取り除く”試みをすべきではなく、むしろ神経症が何を意味しているのか、何を教えるのか、何を目的としているのかを体験すべきである」(*CW10*; par. 361)という考えがある。Jung は、神経症を外から取り除く、つまり近代医学的に対処するのではなく、むしろ神経症に自ら含まれ、その内側から神経症とは何であるかを明らかにしようとしたのである。このような見解は、それまでの Freud の理解を基盤とする神経症理論に大きな転換を迫りうるものだったのではなかっただろうか。

以下に、ユング派において神経症がどのように理解されてきたのかについて、心理学自体の神経症、そして、神経症の治療という大きく二項に分け、詳述していく。なお、以降本論における神経症の理解については、ユング派の神経症理論の視点に基づくものであることを断っておく。

II-2-1. 「心理学の神経症」―解離の否認という視点―

まず、心理学自体に内包された神経症的な性質という観点から述べられた興味深い論考を取り上げたい。Giegerich (1998/2000) は『心理学の神経症』と題された論文において、深層心理学の根本原則は抑圧の解除であり、分析的な臨床実践においては、患者の退行、つまり「自分の病理に従っていくことを認める」(p.8)という。そして、心理学的な理論に関しては、我々は「好機を待つ後へ退く」(p.8)という態度を取ると述べる。このような心理学側の在り方自体が、報いを受けられる見込みに裏打ちされていると Giegerich は指摘している。さらには、「相談室において克服しようとしている抑圧は、われわれ自身の理論における抑圧的な精神として回帰してくる」(p.9)とも述べている。この点において、心理学は神経症的思考に従ってしまっていると Giegerich は指摘し、このような心理学の態度を「否定的なものの否定」(p.9)と説明している。確かに心理学は、Giegerich の言うように、光と影、生と死などの肯定的なものと否定的なものを区別した上で、肯定的なものの方に加担し、否定的なものを矮小化するよう努める傾向にある。そして、心的に健康な発達や成長を目指す限りにおいて、我々は暗黙裡に、患者の今の状態をはねつけており、影を受け入れたように見せかけているだけで、実際は以前と同じく影を抑圧しているといえる。また、Freud (1895/2008) が「ヒステリー者は、主に回想に苦しんでいる」(p.11)として、神経症の誘因を主に過去の経験に求める在り方を示した一方で、Jung は神経症の真の原因は常に現在において見出されることを指摘し、「神経症は養分を与えられ、日々新たに作られている」(*CW10*; par. 363)と述べている。過去に神経症の原因を求めること自体、現在の課題に対する神経症的な否定の現れであることに、Jung 自身も目を向けていたように思われる。

¹ 本稿において Jung の著作『Collected Works of C. G. Jung, Vol.1-20, Princeton University Press, Princeton, New Jersey, 1954-72』より引用した箇所は、慣例にならない、巻数とパラグラフ数で示す。なお、訳はすべて筆者が行っている。

ではなぜ、心理学にはこのような神経症的といえる性質が内包されてきたのであろうか。田中（2001）は、そもそも心理学が近代の意識を対象として、つまり意識に対する意識が生じることで確立してきたゆえ、意識／無意識、内部／外部、主体／客体などの区分、すなわちその解離が不可欠の前提となっていたことを指摘する。改めて見返してみても、Jung の心理学にも、アニマ／アニムス、内向／外向、自我／セルフなど、実に様々な対立する概念が見られる。解離を前提として誕生したことを考えると、心理学が神経症的になる危険に常に曝されていること、また既に様々な筋道で心理学が神経症的な仕方と考えているということは当然のことだとも言える。

しかし、解離と神経症はどのように関係しているのか。田中（2001）は、解離していることが即神経症を意味するのではなく、解離を否認した時にこそ個人は本当の意味で神経症的障害に陥ると主張している。この視点から見た時、神経症を克服され、取り除かれるべきものと理解すること、つまり解離を塞ごうとすることが既に神経症的であると考えられる。ユング派は、心理学自体が神経症的に思考することを自覚し、解離を治療の対象として外側から修復することではなく、むしろ解離を見通して、神経症の内側から神経症自体を看破していこうとする。Giegerich（1998/2000）が、そして、「心理学は自分の神経症にもかかわらずに治癒が行えるのではなくて、自分の神経症のゆえに治癒を引き起こす」（p.27）と述べているのも、この点において理解しうる。

II-2-2. 神経症の治療—弁証法という視点—

それでは、ユング派では神経症の治療に関してはどのような見方をしてきたのであろうか。「自分の神経症のゆえに治癒を引き起こす」（p.27）という Giegerich（1998/2000）の論のように、一見すると矛盾しているような論理構造に、ユング派が神経症をどのように考え、理解しているか、その特徴を窺い知ることができるようにも思う。それは、論理的、弁証法的な理解の仕方である。

田中（2001）は、Jung 自身の二度の神経症体験を振り返る中で、12 歳の Jung が父親の嘆きを聴いて猛勉強することで神経症を克服しようとしたことに着目している。そして、Jung が行動のレベル、すなわち外的な適応というレベルで神経症に対処した一方、もはや神経症を内側から体験しえていなかったと指摘している。しかし、田中（2001）は、この点を逆説的に考えると、神経症の内側から体験するため、つまり内側に留まるためには、むしろ Jung は神経症の外側に出なければならなかったということも考えられるという。つまりは、「神経症においては、そこに入る」とそこから出ることは同一であり、この点において、神経症の治療は極めて逆説的・弁証法的なものにならざるをえない」（田中、2001, p.185）と指摘する。

前項において、解離を否認する時にこそ個人が神経症的障害に陥るという田中（2001）の見解を示したが、もはや治療は「A か B か」という二項に生じる解離を繋ぎとめる、あるいはどちらか一方を支持するという方向ではさらに解離の否認が深まる、つまりより神経症的になっていくはめになる。そのような仕方ではなく、心理学は、「A でも B でもある」と「A でも B でもない」との間に生じる論理的、弁証法的な運動として自らを認識しえた時に初めて、解離の隙間に参入することができると田中（2001）はいう。このような弁証法的な視点から捉えた時、解離を単に結合する、その隙間を埋めるというのではなく、「解離そのものと結合する」（p.186）との考えが生きてくる。

また、Giegerich（1998/2000）は、セラピーにおける治療者と患者の間には常に第三の要因、つまり、第三の「人」、という「第三のもの」が存在していると述べている。この第三のものとは、「も

はや二人の人間のどちらの個人的な所有物と考えられてもならず、それらを越えた独自の現実性を有していることが認められねばならない」(p.4)といい、「心理療法は究極のところ、この第三の『人』にかかっているのである」(Giegerich,1998/2000,p.4)という。このように、ユング派の心理学において、第三のものは治療的に意義を生み出すものとして重視している。

その一方で、田中(2001)は、Jung が解離を再び結びつけるものとして、イメージ、つまりは第三のものを実体化、固定化してしまったことを指摘する。そこでは、第三のものは「AでもBでもある」という一側面に留まり、「AでもBでもない」という否定の側面が見落とされていたため、イメージに固有の運動が奪われたという。さらに、Giegerich(1998/2000)も、第三のものとしてウロボロスの、円環的な運動を挙げている。これは、治療において心理学的な見方が進んでいくと、心理学自身の起源に行きあたるという、非常に逆説的な構造を持った運動である。そして、「この円環的な運動に患者は含まれているけれども、固定した点や運動の最終目的としてではなくて、一緒にこの動きを行って、それを通じて看破されるものとしてである」(p.41)とも述べている。これらの論考から、実体化しえない弁証法的な運動という第三のものに、患者と治療者が、さらには心理学自身が入り込んでこそ治療が生じる、つまりはその運動から外へ出ることが生じてくる、という神経症治療に関するユング派の理解が窺える。

Ⅲ. 遊びにおける神経症

さて、これまでは神経症の理論について、特にユング派の視点を詳述してきた。ここからは、遊びについて詳しく見てきたい。

具体的には、以下の第三章において、まず第一節で遊び研究の諸相を振り返り、特に遊びが分裂と結びやすい点を明らかにしながら、遊びを実体化して捉えることの難しさについて見ていく。第二節では、遊びが数々の分裂を被った背景を、18世紀のヨーロッパにおける「子ども期」の誕生との関連の中で検討する。そして第三節において、遊びが特に否定の側面からアプローチされることを取り上げ、遊びを実体として捉えるのみではなく、分裂によって生まれた隙間そのものや、そこに生まれる関係や運動としての遊びにも着目していこうとする姿勢について示す。そして、第四節においては、遊びの主体の問題に迫りながら、遊びの概念とユング派における神経症の理解がどのように関連してくるのかについて、次の第四章に繋がる形で検討していくこととする。

Ⅲ-1. 遊びの捉え難さ

遊びへのアプローチは多岐に渡る。行動観察やフィールドワーク、文献研究—そのどれもが遊びの本質を求めつつ、遊びのある一面を切り取ったものとなっている。それゆえ、当然の帰結として、統一した定義づけを与えることは難しい。ために【遊び】を辞書(広辞苑第6版)で引いてみると、「あそぶこと・なぐさみ・遊戯」という第一義の他、「猟や音楽」、「遊びめ」、「遊興」といった古典的な意義、「人生から遊離した美の世界を求める」という理念的意義、「仕事や勉強の合間」、また「気持ちのゆとり」、あるいは「機械の部分の間にある余裕」という意義も含まれ、この言葉の及ぶ範囲の広さを目の当たりにする。ここに英語で遊びを意味する【play】を考慮に入れると、演技する、競技する等さらに意義は広がるように、文化差など検討していくうちに、もはや遊びを一

義的に捉えることは困難を極める。

遊びというものが、一見馴染み易く捉えやすいようでありながら、実に捉えどころのないものであることは、遊び研究の先駆けともいえる Huizinga や Caillois の論を見ても明らかである。社会学的な視点から遊び研究を行った Caillois (1958/1970) の理論によれば、どのような遊びもその性質により四種（競争・運・模擬・眩暈）に分類できるといい、それらの枠組みに従って社会の様々な事象における遊びの現れが細分化して論じられている。同じく Caillois による遊びの定義もまた、自由な活動、隔離された活動、未確定の活動、非生産的活動、規則のある活動、虚構の活動という 6 つの形式的側面を並べたものとなっている。挙げられたどの性質も、たしかに遊びを考える十分条件にはなりえるが、必要条件というには不十分であろう。一方で、Huizinga (1938/1973) のように、政治、戦争、芸術など、ありとあらゆる人間活動の根源に遊びを見出すといった在り方も、遊びを論じる上での着地点として珍しくないものと思われる。このように、遊びを対象にした研究を試みると、遊びの全体像や体系（という空想）を前に、我々は呆然とする他なく、そのような遊びの全体へ一歩でも近づく手段として、遊びを性質や次元などにより切り分けることで理解しようとしてきたのである。

そんな中、Henriot (1973/1974) は、遊びをひとつの事実であると仮定した時に問題となることとして、その事実がいったい何であるかを明確にすること、その事実の示す諸形態を分類すること、その事実を説明すること、という三点を挙げている。このうち、二点目と三点目についてはこれまで諸家により熱心に取り組まれてきたのに対し、一点目に関してはほとんど気かけられてこなかったと指摘した。そして、「生理学者、社会学者、心理学者たちは、さまざまな説明理論を提出し、遊びの多種多様なカテゴリーを引き合わせ、分類していながら、まず第一にどんな基準にもとづけば遊びを定義し認知することができるのか、その点を考えてみようとは、めったに思いつきもしない」(p.12) と述べている。この主張からも、遊びがいかに真正面から捉え難いものであるかが見て取れるだろう。

一方で、同じく Henriot は、遊びをただ単に分類し整理するのではなく、段階、階層という視点から理解しようとした。この視点は遊びの理解に深みを与えたように思われる。Henriot (1973/1974) は、遊びを観念として捉え、一つには客観的な活動形式としての遊び、二つ目に遊ぶ人のおこないとしての遊び、そして三つ目として何が遊び手に遊ぶことをさせるのかという、遊ぶ人の内部で遊びという活動および遊びの実在性そのものを可能にしているものとしての遊び、という三つのレベルがあると主張した。特に二点目、三点目に関しては遊びを遊びたらしめる主体に関わる重要な視点と思われるので、後の第四節に詳しく取り上げることとする。

遊びに一つの筋の通った定義を与えようと熱心になれば、Henriot (1973/1974) のいうように、遊びの持つ二つの誘惑に囚われてしまうように思われる。すなわち、すべてのものやいたるところに遊びを見いだしてしまう誘惑と、ある方法論的な態度を採用して、その結果どこにも遊びを発見することができなくなってしまうという二つの矛盾した誘惑である。Huizinga や Caillois はこのような誘惑に弄ばれたともいえるのではないだろうか。

Henriot のような段階、階層という見方をすれば、遊びの捉え難さは生じてこないように思われる。しかしなぜ、Huizinga や Caillois の立場のように、あらゆる人間の営みの根源に遊びがあるという主張や、遊びに限定や制約を与え、積極的に定義づけようという試みが遊び研究においてよく

見られるのであろうか。ここで浮かび上がってくるのが、そもそも遊びは研究対象として解体可能な実体なのであろうか、という疑問である。次節でこの点について見ていきたい。

III-2. 遊びと分裂

これまでの研究の中で遊びが様々な分裂を被ってきた背景には、遊びというものが実体として、あるいは一つの全体的なまとまりを持ったものとして捉えられているという前提が存在しているといえる。それでは、どうしてこのような前提が生まれてきたのであろうか。これに関して、歴史的な背景の中に、遊びが様々な分裂と結びつきを深めるに至るきっかけが見えてくるように思われる。

17世紀のヨーロッパにおける労働の発見、資本主義の台頭によって、労働との対極にあるものとしての遊びという営みが人々に意識されるようになった。Ariès (1960/1980) のいうように、この時期は「子ども期」という人生の中でも他とは異なる特別な段階があるという意識が生まれた時期でもある。それまでは大人も子どもも区別なく、子どもは小さな大人として扱われてきたが、同様に大人も子どもも遊ぶものであり、特別に子どもと遊びが強く結び付けられることはなかった。しかし、「子ども期」の誕生により、子どもは今後の労働に向けての準備を行い、また人生の基礎体力を養い、教養を身につける時期と位置付けられた。また、遊びにもこれらの目的意識が付与され、遊びが目的に適っていることが望まれるようになる。同時に、ここでいう遊びはもっぱら遊興など活動の次元であるが、社会階級によって、つまり貴族と民衆によってなされる遊びに差異が生じた。特に民衆に対しては、社会の秩序、支配体制を脅かすと思なされた遊びは、厳しい取り締まりや禁止の対象となった。子どもと大人、貴族と民衆、労働とそれ以外の活動など、様々な分裂が生じる過程において、遊びは分裂を被り、また自らも分裂を生むものとしての道を歩み始めた。そして、近代以降、諸家が自身の立場に相応しい言葉や手法により、今日まで遊びを解体してきたのである。

その結果として、Caillois (1958/1970) が「すべて遊びは規則の体系である」(p.17) と述べたように、遊びは概して、何が遊びであるのか、何が遊びでないのかがルールにより線引きされ、形式的に構造化されてきたのである。遊びの行為を取り上げると、ルールのあるスポーツやゲーム、演劇、役割のあるごっこ遊びなど、規則に当てはめれば掬い上げることは可能と思われる。しかし、どのような遊びの分類も、遊びとそれ以外を本質的に区別するものではないと西村 (1989) は指摘する。分類されたものは、そのどれも遊びの性質を帯びた遊びの一形態と言えるかもしれないが、ではそれらを集めた結果を眺めたところで、遊びとは何か、についてはほとんど何も言えない。そこで、遊びを、解体、分裂しうる実体として捉えること自体を今一度見直す必要があるといえる。

III-3. 遊びへの否定からのアプローチ

遊びの捉え難さには、実体として遊びを捉えること自体の難しさがあることを前節までに指摘してきた。しかし、遊びを解体し、遊びの実体に近づき、定義づけようとした努力の中にも、遊びの興味深い一つの特徴が浮かび上がってくる。それは、遊びが否定の側から理解されやすいという事実である。

西村 (1989) は、「遊びの諸規定は、もっぱら、われわれになじみの現実の諸カテゴリーの否定によって、消去法的にえられる」(p.16) という。確かに、遊びについて論じられる際、“非現実”、“非日常”、“無意味な”、“目的を持たない”等、打ち消しにより語られる機会が多いことは大きな

特徴であろう。このことの背景に、遊びを否定の側面から捉えることで、逆説的に遊び自体について浮き彫りにしようとする意図があるように考えられる。ところが、『遊びはなにでないか』については知りえても、『遊びとは、それ自体として、なにであるか』について、すなわち遊びの独自の存在性と本質については、依然として、ほとんどまったく知らないのである」（西村,1989,p.16）と述べられているように、否定の側面から遊びを逆説的に捉える試みはうまくいっていないかのようにも思われる。しかし、このことが遊びの本質を捉えるための重要なヒントともなるように思う。

遊びは一義的に定義すると、かえって何もかもが遊びであり、何もかもが遊びでなくなるとはHenriot (1973/1974) の指摘した通りである。一方で、遊びは常にこのようなジレンマに裏打ちされているともいえるのではないだろうか。これが否定からのアプローチを受けやすいことの一つの原因としてあると考えられる。

Caillois (1958/1970) は、遊びに関する制約の存在と、その中において創意する能力とを結びつけることなど、二つの極が存続しつづけること、両者のあいだにはある関係が保たれていることをも遊びという言葉が担っていると指摘している。規則の内側に遊びと呼ばれる営為が生まれると同時に、遊びという言葉は、規則が生み出した外側と内側の隙間、分裂した二極に生じた新たな関係をも表すという。遊びは分裂を余儀なくされてきたが、その分裂により生じてきた隙間自体にも特有の意義を見出すこともできるといえる。

さらに、上記のような Caillois (1958/1970) の二つの極が存続しつづけることという捉え方には、二極の隙間自体を固定化して捉えるのではなく、その隙間に絶えず生じている動きを見通す視点が含まれていると考えられる。そして、何もかもが遊びであり、何もかもが遊びでなくなるというような遊びの孕む二律背反の関係を実現できるのは、弁証法的な捉え方であるように思われる。どちらかを否定する、また矛盾を埋めようとするのではなく、それらを弁証法的に理解し、遊びの二律背反を見通すという視点から、営みや動きとしての遊びが浮き彫りになってくるのではないだろうか。

III-4. 主体との関わり—遊びを遊ぶ—

ところで、Henriot (1973/1974) が、遊びを観念として見たときの三つのレベルを挙げたことは本章第一節で述べた。そして、一つ目の客観的な活動形式としての遊びというレベルにおける論考は多いものの、二つ目の遊ぶ人のおこないとしての遊び、三つ目の遊ぶ人の内部で遊びという活動および遊びの実在性そのものを可能にしているものとしての遊び、という二つのレベルではあまり追究されてこなかったことに言及している。この二つのレベルは、とりわけ遊ぶ主体との関わりの中で見えてくる遊びに関する言及であると思われる。

前節において、“非現実”、“非日常”など否定の側面からのアプローチについて取り上げたが、ここには“現実”とは何で、“日常”とは何かを判断する存在が不可欠に思われる。遊びを捉えることの難しさには、遊びがもはや我々自身から切り離しては考えられないという点も少なからず影響していると思われる。一般に、子どもがおもちゃや遊具を使って互いにやりとりしている姿を見て、人々は“遊んでいる”と思うだろう。しかし、おもちゃや公園、休み時間などのセッティングは遊びを誘発するにしても、それらだけが遊びを生み出すのではない。遊びを生み出す主体とは何だろうか。

Henriot (1973/1974) は、「遊ぶ意識こそ、遊ぶことの何より第一の構成要素」(p.81) と主張する。そして、この「遊ぶ意識」について検討する時にも、遊びの孕む二律背反に直面する。Henriot は「遊びに無我夢中になるとは、遊びからそとへ出るということだ」(p.111) と述べている。このように、“遊んでいる”自分を俯瞰的に自覚すると、既に“無我夢中”の状態からは放り出される。例えば、ごっこ遊びを取り上げれば、これは大きくは演戯のカテゴリーに含まれると考えられるため、役を演じている自覚がなければごっこはごっこになり得ないが、そのことが自覚されてしまえば、もはや遊びではなくなる可能性もある。

しかし、このような矛盾を持ちながらも、あるいは矛盾があるからこそ、遊びの主体が立ち上がってくるように思われる。Henriot のいう「遊びに無我夢中になるとは、遊びからそとへ出るということだ」(p.111) との言葉が意味するのは、遊びに入っていく意識と遊びから出る意識は同一のものであるということではないだろうか。もはや、“私は遊んでいる”という一面的な意識のみが遊びを生み出す主体とは言えない。ある種、遊ぶ意識は解離していると考えられるが、前節でも取り上げたように、ここにも弁証法的な動きとして遊びが生じているものと思われる。

そして、Scheuerl (1979) が、遊び手が遊びを定義するのではなく、遊びが遊び手を定義すると指摘しているように、このような弁証法の中においては、遊び手が遊んでいながら、遊びが遊び手を遊び手たらしめるという逆説的理解が可能となり、遊びの主体は、単に遊び手に属するものではないといえる。この意味において、遊びは Giegerich (1998/2000) が述べている「第三のもの」という概念とパラレルに理解されるように思われる。この第三のものを、Giegerich が第三の「人」と表現し、治療者と患者の二人の間に生じてきながら、どちらの所有物でもないと説明を加えたことから、遊びは、二極の間において全く独自の主体として我々の前に立ち上がってくる第三のものとして捉えられるのではないだろうか。第三のものとしての遊びを考えると、遊びの中にいるとき、人は遊びの主体がもはや自分（自我）ではないように体験しているともいえるように思う。

IV. 神経症の治療における遊び

では、ここで観点を移し、神経症において遊びの様相がいかに関与するかについて検討していきたい。ここまで見てきた遊びの概念をユング派による神経症理論を参照しながら検討していくと、神経症を遊びの病理として理解する視点や、またその治療においても遊びが様々なレベルで関連している可能性が見えてくる。

先に述べてきたように、ユング派の理解における神経症は、さらに言えば心理学自体は、解離や分裂を前提として成り立っているといえる。ユング派が指摘するように、神経症を治癒の対象として、解離した隙間を埋める、あるいは神経症を取り除くといった考えでは、治療が立ち行かなくなってくる。そうではなくて、ユング派はその解離の隙間に生じる弁証法的な動きに自ら含まれることで、治療を実現しようとするのである。田中 (2001) の言葉を借りれば、「解離そのものと結合する」(p.186) のである。このような治療的営みと遊び概念との関係を見ていくとき、様々なレベルにおいて遊びが治療に関連してくるように思われる。

ユング派のように、神経症を外から眺めるのではなく、内側に入り込むことがまず治療の第一歩と考えれば、患者が解離をどのように捉え、また体験しているのかを理解していくと同時に、解離

した隙間に弁証法的な動き、つまり、遊びが見出されうるかについて見ていくことも必要ではないだろうか。神経症者は、症状を取り除きたいと一方で望みつつも、解離そのものを症状により否認、あるいは塞いでいる、遊びの生じたい状態に置かれている。この点で、神経症を遊びの病理と捉える視点も生まれてくるかもしれない。また、患者と治療者との関係が、第三のものとしての遊びを生じさせることができているのか、という見方もできる。これらのレベルで遊びが生じてきにくい場合、まずは治療者が遊びに開かれていることや、また、患者のもつ遊びの構造を見通すことが、治療の実現に結びついてくるとも考えられる。

遊びというものは、第三章でも述べたように、遊びそのものが主体として立ち上がって来るその時に最も生きるものである。つまり、遊びは過去でも未来でもなく、現在、“遊びを遊ぶ” また“遊ばれる” 瞬間において意味を持つ。Jung (*CW* 10; par. 363) が神経症病理を考える時に過去ではなく現在を重視したことも考えると、遊びという視点から、今日の前にいる患者の神経症構造を捉えていくことも可能であるように思う。このように様々に生じてくる遊びの変容が、治癒をもたらすかもしれない。Winnicott (1971/1979) が精神療法そのものを「遊ぶこと playing」という言葉で表現しようとしたのも、このような観点からすると肯けるものである。

V. 今後の課題 — “二” のない遊び—

さて、最後に本論から見えてきた課題について触れておきたい。

河合 (2013) のいうように、従来の心理療法は、「内面と主体性を持った個人の成立、それに関連する主体と客体、こころと物の分離」(p.19) が前提となっており、神経症も解離によって生じる二項対立など、“二” を基本にした病である。本稿で扱ってきた遊びもまた、二つの極を弁証法的に遊動することの中に生じるという構造を持ち、“二” を前提としている。いわゆる神経症水準とは捉えられない、発達障害などのクライアントの場合、内側と外側や、主体と客体などの分裂がそもそも存在しないかのようにも見える。このような、“二” を持たないクライアントには、遊びによって生み出される弁証法的な動きは見出せないのであらうか。

“二” が前提とはならない発達障害に関して、竹中 (2010) は、発達障害の子どものプレイセラピーにおいては、そこで繰り広げられる遊びに象徴的な意味を読み取ったり、何らかの物語が展開していくかのような遊びの内容の変化を期待することが容易ではないと指摘する。プレイセラピーだけでなく、大人の心理療法においても、内的な葛藤や主体が前提とならない場合がある。河合 (2013) はユング派の視点から、心理療法にはまず第三のものが生み出されてくるが必要であることを強調している。そして、「語りが第三のものとしてクライアントを通して自ら物語る」(p.43) と考えたように、第三のものを主体と捉え、雑談風の語りや、キャンセルなどの隙間や沈黙が第三のものの誕生につながる場合が多いと述べる。“二” を前提としない場合、神経症的に遊びを捉えることを一旦横に置き、いかに第三のものが生じるか、治療の場での遊びの生成の契機を捉えることが重要なのではないだろうか。この点については今後の課題としたい。

文 献

Ariès, P. (1960) : *L'enfant et la vie familiale sous l'Ancien régime*. Plon. 杉山光信・杉山恵美子 (共訳) (1980) : 〈子供〉の誕生 アンシ

アン・レージュム期の子供と家庭生活. みすず書房.

Axline,V.M. (1947) : *Play therapy*. Boston : Houghton Mifflin. 小林治夫 (訳) (1972) : 遊戯療法. 岩崎学術出版社.

馬場謙一 (1990) : 神経症と心因反応. 福島章・村瀬孝雄・山中康裕 (編) : 臨床心理大系第 11 巻 精神障害・心身症の心理臨床. pp29-76.

Cailliois,R. (1958) : *Les jeux et les homes*. Gallimard. 清水幾太郎・霧生和夫 (訳) (1970) : 遊びと人間. 岩波書店.

Freud,S. (1895) : *Studien über Hysterie*. 芝伸太郎 (訳) (2008) : ヒステリー研究. フロイト全集 2. 岩波書店.

Giegerich,W. (1998) : *The Soul's Logical Life*. Frankfurt et al: Peter Lang. 河合俊雄・北口雄一・猪股剛 (訳) (2000) : 魂と歴史性 ユング心理学の展開 (ギーゲリッヒ論集) 1. 日本評論社.

Giegerich,W. (2013) : *Neurosis: The Logic of a Metaphysical Illness*. Spring Journal.

Henriot,J. (1973) : *Le jeu*. Presses Universitaires de France. 佐藤信夫 (訳) (1974) : 遊び—遊ぶ主体の現象学へ—. 白水社.

Hilman,J. (1983) : *Archetypal psychology: a brief account: together with a complete checklist of works*. Spring Publications. 河合俊雄 (訳) (1993) : 元型の心理学. 青土社.

Huizinga,J. (1938) : *Homo ludens*. Haarlem : Tjeenk Wilink & Zoon. 高橋英夫 (訳) (1973) : ホモ・ルーデンス. 中央公論新社.

Jung,C.G. (1934) : *The State of Psychotherapy Today*. In :The Collected Works of C.G.Jung vol.10 Princeton University Press. 1970 pp157-176.

河合俊雄 (編著) (2013) : ユング派心理療法. ミネルヴァ書房.

北岡美世香 (2013) : プレイルールの「内」と「外」を行き来した 3 歳男児との遊戯療法過程. 心理臨床学研究, 31(2), pp301-311.

松本雅彦 (1993) : 精神病理学の意義と展望 精神病理学の「遊び」. 臨床精神病理, 14(1), pp33-41.

皆本麻実 (2014) : 心理臨床における「遊ぶこと」に関する一考察—第三項という観点から—. 京都大学大学院教育学研究科紀要, 60, pp261-272.

森崎志麻 (2014) : 「ひきこもり」と役を演じる感覚に関する一考察—「遊び」の概念を手がかりに—. 京都大学大学院教育学研究科紀要, 60, pp45-58.

西村清和 (1989) : 遊びの現象学. 勁草書房.

西坂恵理子 (2012) : 描き直すことの意義をめぐって : ある青年との心理療法過程. 心理臨床学研究, 30(4), pp524-535.

Scheuerl,H. (1979) : *Das Spiel*. Weinheim und Basel.

竹中葉苗 (2010) : 子どもの発達障害事例の検討—融合的な世界の終焉と展開. 河合俊雄 (編) 発達障害への心理療法的アプローチ. 創元社. pp51-79.

田中康裕 (2001) : 魂のロジック ユング心理学の神経症とその概念構成をめぐって. 日本評論社.

Winnicott,D.W. (1971) : *Playing and Reality*. Tavistock Publications Ltd, London. 橋本雅雄 (訳) (1979) : 遊ぶことと現実. 岩崎学術出版社.

Zulliger, H. (1952) : *Heilende kräfte im kindlichen Spiel*. Ernst Klett Verlag. 堀要 (訳) (1978) : 遊びの治癒力. 黎明書房.

(心理臨床学講座 博士後期課程 2 回生)

(受稿 2014 年 9 月 1 日, 改稿 2014 年 11 月 20 日, 受理 2014 年 12 月 26 日)

遊びの神経症

—ユング派の神経症理論を手がかりに—

皆本 麻実

Freud は神経症を心的外傷に起因し、神経症的な解離は克服されるべきものと捉えたが、ユング派は、そのような心理学の態度は解離を否認するもので、この態度自体が既に神経症的であると指摘している。さらには、この心理学自らの神経症的性格ゆえに心理学は神経症を治癒しうる、という逆説的な視点をも示した。ここで、遊びについて見ると、遊びは様々な解体され理解が試みられてきたが、その全体像は捉え難いものである。遊びを一義的に捉えようとする、至る所に遊びを見出すか、どこにも遊びが見出せないという、Henriot の指摘する二律背反した性質が浮き彫りになる。しかし、ユング派が神経症を理解した道筋を参照し遊びについて考えた時、遊びの捉え難さや矛盾した性質を見通せると筆者は考えた。そこで本稿では、ユング派の神経症理論に基づき、弁証法や「第三のもの」などのユング派の概念を援用しながら、遊びの概念について考察した。

Neurosis of Play: Considering Jungians' Theory of Neurosis

MINAMOTO Asami

Freud insisted that neurosis comes from one's psychic traumas and that the neurotic dissociation should be overcome. However, some of Jungian analysts point out that such a way of thinking had a possibility to escape from the neurotic dissociation, and such an attitude itself thus can be regarded as neurotic. Moreover, they show such a paradoxical idea that psychology can cure neurosis because of its own neurosis. On the other hand, "play" has been understood by decomposing it into its various aspects, but it would be difficult for us to grasp it in its totality. As Henriot points out, when attempting to define "play" in its singular meaning, its self-contradicting nature becomes apparent; we either find it everywhere or we find it nowhere. However, the author argues that it is possible for us to see through to the difficulty of comprehending the meaning of "play" and to its contradictory nature by considering "play" in the light of Jungians' theory of neurosis. This paper proposes the idea of "play" from the viewpoint of Jungians' theory of neurosis by making use of the conception of dialectic and Jungians' idea of "the third".

キーワード：遊び，神経症，弁証法，第三のもの

Keywords: play, neurosis, dialectic, the third

